The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大川周明（1886～1957）とオーロビンド・ゴーシュ（1872～1950）：大川の行動を支えた思想的背景の研究
Author(s)	Barve, Tejaswini Ramesh
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26227
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕

大川周明（1886～1957）とオーロビンド・ゴーシュ（1872～1950）
—大川の行動を支えた思想的背景の研究—

学位申請者　　BARVE Tejaswini Ramesh

大川周明は「アジア主義」のイデオローグとしてよく知られ、彼の「アジア主義」は、政治的観点や思想的観点から多くの学者に研究されている。特に近年、このテーマを中心に出版された大川関係の書物や論文の数は多い。「アジア主義」のイデオローグとしての大川の役割は最も際だった側面であることは言うまでもない。ただし、彼の経歴を一見するだけで分かるように、大川は宗教・哲学研究に強い関心を示していた。この点は、大川が精神異常と判断されてから入院した後、イスラームの聖典コーランの日本語訳を完成したことからも明らかである。

大川が示した宗教・哲学思想への関心は彼の若い時代の経験から生まれたものである。特に、中学時代、大川は将来文系に進みたいと思ったとき、父親に強く反対された。大川にとって非常な悩みの時期であった。そのとき彼は宗教に救いを求めたのである。大川の文系に進む選択肢は認められたが、この経験を経てから、宗教が大川にとって生涯続く関心事であった。大川は中学校を卒業した時点で既に漢文や儒教の教えなどが身についていたし、同時にキリスト教の教えも学んでいた。高校に入ってからも宗教に対する関心が持続された。結局、大川は、本当の宗教の意味を求め、東京帝国大学に入学し、宗教・哲学学科に入り、仏教とインド哲学思想を専攻した。

以上の説明から分かるように、宗教への関心は大川の人生の欠かせない部分であり、彼の思想形成に強い影響を与えた要因である。ただし、今まで、大川の生涯のこの側面、彼の思想形成において重要なこの点は、彼の「アジア主義」思想ほど注目されていない。そこで、筆者は、大川の人格、その人となりを正確に理解するため、彼の初期の宗教・哲学思想への関心を研究しなければならないと考えた。

従って、本論文では、大川の宗教・哲学思想を明らかにすることが主要な関心である。筆者の関心は大川の大学時代とその後のインド哲学思想の研究の足跡である。特に、インド思想が大川にどのように影響を与えたかを調べた。大川はその著作『安楽の門』や『復興亜細亜の諸問題』で、「一生を印度哲学の色読に捧げることであった」と述べており、筆者はこの点が非常に重要であると判断した。大川のこの発言が、彼がインド哲学思想に非常に関心を示していたことを明瞭に示していると思われたのである。

こうして、大川の人格形成を正確に理解するため、大川におけるインド哲学の影響は非常に重要であることがわかる。大川の思想遍歴におけるインド哲学の重要性を探る過程で、インドの哲学思想家オーロビンド・ゴーシュの思想的影響の重要性がやがて明らかになった。この人物の思想を精査することによって、大川の思想傾向との一致、大川の求めている「行動と思想の一致」がゴーシュの中にあることが分かったのである。

本研究では、まず大川の生い立ちを簡潔に述べる。そして、彼を大学でインド哲学思想の勉強に導いた学生時代の経験について解説する。さらに、大川が示した宗教・哲学思想への関心を深めた人物、つまり、彼の大学時代、彼に強い影響を与え人物を紹介する。ただし、大川の純粋な宗教・哲学思想研究を「革命的に」転換させる事件が起こった。それは神田の古本屋で起こった。本人の言葉によれば、ある日サー・ヘンリー・コットンの *New India: Or, India in Transition*（『新印度』）を偶然買い、それ読んだ結果、宗教・哲学思想の勉強をやめたということになっている。大川がこの本を読んで受けた影響が極めて大きいことは筆者も認める。そして、その後政治的活動を始めたことも否定しない。しかし、大川はこの事件の結果、政治思想に重点を移行させ、アジア主義を掲げるイデオローグになってし

まったのではない。彼は宗教研究をやめたのでは、まったくない。この点はこれ以後に大川の出版した宗教思想関係の書物のリストを見れば明らかである。その中に 1930 年に出版された『印度思想概説』があった。この書物は、同時期の大川のインド思想に関する知見を明らかにする内容であり、彼のインドに関する知識を知るためには、必須の文献であるといえる。従って、本論文の第 2 章は『印度思想概説』の詳細な分析を行っている。『印度思想概説』はヴェーダ時代から現代までのインド思想史を語り、その時点での大川のインド思想の知識のレベルが手に取るように分かるのである。『印度思想概説』には、インドの宗教・哲学思想を解説し、数千年わたる宗教史と思想の変化が記述されている。そして、近代のインドの精神的衰退が原因となって植民地化されたインドは、イギリスの奴隷となり、政治的自由をなくした。大川によると精神の衰退がインドの堕落の真の理由である。つまり、インドが精神的に弱体化したために、植民地化されたのである。

大川によると、この精神的な衰退の状態から復興する道を教えたのが、インドではじめての「真個の国民哲学者」オーロビンド・ゴーシュである。ゴーシュが『バガヴァッド・ギーター』に基づいた「行」をインド青年に教え、精神的かつ国民的意識を喚起した、と大川は述べている。大川がゴーシュを非常に高く評価したことは明白で、この点は本論文の最後の章で詳しく議論されている。ただその前に、大川とゴーシュの関係を説明しなければならないので、両者を結びつけたフランスの詩人、ポール・リシャールについての説明を行った。リシャールと妻のミーラは 1916 年に来日した。リシャール夫妻は 4 年間日本で暮らし、その中の一年間、大川も彼等と同居する程親密な関係であった。そして、大川はリシャールの著書を日本語に訳したこともある。その中で本研究と最も関係のある著作は『永遠の智慧』である。

『永遠の智慧』はまずゴーシュによってフランス語から英語に訳され、『アーリヤ』に連載された。『アーリヤ』は、リシャール、ゴーシュとミーラが、リシャール夫妻のインド滞在中に出版された月刊雑誌である。ただし、1914 年から 1921 年まで出版され、1921 年に廃止された。『アーリヤ』にはゴーシュとリシャールが書いた記事が載っている。リシャールの記事は全てゴーシュによってフランス語から英語に翻訳されている。この『アーリヤ』にゴーシュの *Essays on the Gita* も連載されており、本論文の最後の章で詳細に分析した。『永遠の智慧』と *The Eternal Wisdom* に書かれている『バガヴァッド・ギーター』の箇所を比較検討すると、「要求なしの行」の重要性に関する教えが繰り返し述べられている『バガヴァッド・ギーター』の前半 6 章が重点的に採録されていることが分かり、これが大川の思想形成にとって決定的な意味を持っていたように思われる。そして、『バガヴァッド・ギーター』が大川の思想形成に重要な位置を占めることも分かる。そこで、筆者に残された作業は、ゴーシュの *Essays on the Gita* を詳細に分析し、大川がゴーシュを「偉大な人格」や「現代印度最大の思想家」と称して高く評価している理由を探ることであった。本論文の最後の章で、この分析を行った。その際キーワードとなるのが、「知行合一」と「梵我一如」である。本論文では一貫してこの二つの表現に注目して比較検討を行った。その結果、最終章において、ゴーシュの思想の精査を通じて、大川にとってインドの思想の根本にある宇宙的究極の原理である梵と形而下的世界に住む我の一致は、結局、思想と行動の一致に等しく、両者のバランスこそ究極の理想と考えられているであろうことを突き止めた。

すなわち、その検討の結果、ゴーシュと大川の「梵即我」(梵我一如) の概念の理解が非常に似ていることがわかる。しかも、大川が久しく身につけていた儒教の「知行合一」の概念とゴーシュが説いた Karmayoga （「行」の道）の教えが似ていることも明らかになった。結論としては、 大川とオーロビンド・ゴーシュが直接会ったことがないにもかかわらず、二人の思想は極めて近似していることが明らかになった。この事実にもかかわらず、大川がゴーシュに直接影響を受けたかどうか断定できない。ただ、少なくとも、大川の思想にはゴーシュの思想の影響が色濃く見られ、後者の思想に自らの考えを反映させていたことがほぼ明らかになった。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（Barve Tejaswini Ramesh）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
主 査	教授	嶋本隆光
副 査	教授	高橋　明
副 査	准教授	佐野方郁
副 査	准教授	五之治昌比呂
副 査	准教授	柴田芳成

論文審査の結果の要旨

本論文は、これまで大川周明研究がいわゆる「アジア主義」に偏向した形で進められてきた現状を踏まえ、旧来とは異なる視点を提示するものである。その視点とは、大川の宗教・倫理・哲学的思想であり、候補者は、大川の一貫した思想と行動の一致を求める性格、態度を候補者の母国、インドとの関連の下で考証している。全体として総花的な解説を回避して、一点に焦点を当てている研究姿勢が評価できる。

本論文は、4章から構成され、第1章は、大川周明の生い立ちから、運命を変えた事件として知られる「神田事件」に至る過程について扱われている。特に、後者について、定説を踏まえながらも、思想研究の観点から、運命を変えたというよりむしろ大川に思想と行動のバランスに目覚めさせた事件として評価しなおしている。これは大川の思想遍歴という観点から出てくる評価であると思われ、これまで研究者によってことさらに指摘されたことがない。

第2章では、大川のインド（特に古代インド）思想の理解を1929年刊行の『印度思想概説』を中心に考察している。本書の検討を通じて、一般に多神教といわれるインドの宗教は、梵我一如（ブラフマンとアートマンの究極的一致）の発見を本領とするといわれるが、最終的に究極の宇宙的存在に収斂する原理を持つことを大川が確認している事実を明らかにしている。さらに、大川が現在のインドの凋落は、本来の梵と我の均衡を喪失した点にあり、外来勢力の侵入を容易にした原因と考えていることが指摘されている。また、副次的発見ではあるが、検討の過程で本書の古代インド思想に関連する3つの章は、ドイツ人碩学ドイセンの著作 Outlines of Indian Philosophy をほぼ忠実に翻訳、または翻案しながら、大川が自説を開陳していることを発見している。この点は大川自身明示しておらず、これまでの大川研究で指摘されたことがない。さらに、全集の編者による指摘もない点で、重要な発見といえる。

第3章では、本論文のタイトルにもなっているオーロビンド・ゴーシュとの関連を語る過程で不可避の存在であるポール・リシャールについて記述している。リシャールは大川を語る際、必ず言及される重要な人物であるが、これまでそれほど深く調査されたわけではない。特に、この人物の重要性は本論文の主題であるオーロビンド・ゴーシュと大川の橋渡しをした点にある。この点を明らかにするために、リシャール自身は言うまでもなく、彼の妻（ミーラ）に関連する著作や子孫の残した記録を含めて幅広く資料を駆使して、足跡を追っている。おそらくこれまで公刊されたリシャールに関する最も詳細な記述といえるかもしれない点で評価できるだろう。

最終章は、大川が自らの著作でゴーシュを極めて高く評価している事実を明らかにした上で、その思想が大川のものとどの点で類似しどの点で異なっているかを明らかにしている。最終的に、ゴーシュが『バガヴァッド・ギーター』の解釈について示したような、宇宙の究極の原理（＝梵）に、現実の世界に生きる人間（＝我）が統合される、すなわち神意を踏まえた我がその神意にしたがって行為を行う状態こそが理想の均衡が保たれた状態であるという解釈が、大川の理想であった「知行合一」的理想と合致する点を示唆している。

このように、本論文では大川周明が青年時代から持っていた「知行合一」的傾向をインドとの結びつきを深めるにしたがって思想的に深化し、確実にしていった過程が明らかにされている。大川が自らの思想を全面的にゴーシュに負っているのではないものの、重要な点での共通点は明らかであり、彼がこのインドの哲学者から自らの思想と行動に関する哲学・人生観を形成するに際して多大な影響を受けたであろうことは決して無視できないことを指摘しているのは、妥当な結論であると判断した。

以上から、博士論文審査委員会は全員一致でBarve Tejaswini Ramesh候補の論文は日本語・日本文化の学位にふさわしいものと判断した。